

図書紹介

Clifton R. Wharton, Jr.: *Research on Agricultural Development in Southeast Asia*. The Agricultural Development Council, Inc., New York, 1965. 62 p.

Agricultural Development Council はアジアにおける農業発展の経済的・人的諸問題にかんする教育と研究を支持する団体で、J. D. Rockefeller, 3rd を理事長とする。これは、もと The Council on Economic and Cultural Affairs とよばれ、「中国の土地利用」の著者として有名な John Lossing Buck によって、戦後はじめられたものである。多くの日本の農業経済学者（わたくし自身も含めて）が、この Council の grant でアメリカに留学した。

本書の著者 Wharton 博士はこの Council の Singapore 地域代表として東南アジアに1958年から64年に至る間駐在、ベトナム・タイおよびマレーシアをカバーし、あわせて、マラヤ大学農学部のアgricultural Economics 客員教授をつとめた。現在、ニューヨークにもどり、Council の American Universities Research Program の director である。

かれは東南アジアに在勤中、あまたの論文を発表。わたくしは東南アジアにかんする農業経済学者として世界的に見て最もすぐれた1人だと思う。とくに、この Council の目的からして、かれは東南アジアにおける農業経済学の教育と研究の実態を最もよく知っているといえる。

本書「東南アジアにおける農業発展の研究」は、農業発展の研究についての研究の現状と問題点を明らかにしたものである。

本書が強調するところは、第1に東南アジアの農業経済学者の仕事は主として叙述的あるいはfact-findingなものにとどまっている。第2、東南アジアをとりあつかった欧米農業経済学者の仕事は、価値や制度を与えられたものとして、経済機構の機能分析にかざられる。第3、欧米農業経済学者による刊行物の多くは、理論的あるいはmodel-buildingにとどまり、それが

経験的事実によって裏づけられていない。第4、農業発展の初期段階をとりあつかった研究は、農民の価値・態度・動機についての研究にかけている。最後に、研究者のうちのmodel-buildersとempiricistsの間にギャップが大きい。

これらのことを、過去と現在の研究、農業の初期発展のモデル、東南アジアにおける農業発展の主要問題、現在の研究の欠陥、これからの研究の直面する問題などにわけて、論じている。参考文献として72冊ばかりあげられているが、著者の好みがわかって、おもしろい。

つぎのものが付録としてかかげられている。

(A) 東南アジア諸国の農業経済にかんする大学・政府機関・団体の国別一覧表

(B) 東南アジア農業経済にかんするアメリカ以外の大学・政府機関・団体の国別一覧表…この日本の項目では、アジア経済研究所（東京）と、University of Kyoto, Center for Southeast Asian Studies (Kyoto, with field office in Bangkok) との、ふたつだけだ。

(C) 東南アジアの最近刊行された農業経済学関係の文献目録

(D) 東南アジア農業経済学研究課題の優先順位についての提案

わたくしは、著者がいわんとするところは、だいたい賛成だ。ただ、なぜかれの指摘する欠陥が生まれたかの分析が本書では十分でない。しかし、東南アジア農業経済研究の現状と問題点とについて、これほど明快に、しかもまとまって説いたものはない。この意味で、東南アジアの農業経済学研究の不可欠な、指導案内の役目をはたす入門書である。この成果を高く評価したいと思う。
(本岡 武)

United Nations: *Economic Survey of Asia and the Far East, 1964*. ECAFE, Bangkok, 1965. x+281 p.

ECAFE (Economic Commission for Asia and the Far East, United Nations) 事務局より毎年、ECAFE

地域の経済発展にかんする年報が発行され、本号は18冊目にあたる。ところが1957年以来、この年報は2部にわかれ、第1部は長期的動向分析のための特定の重要問題を取りあげ、第2部は過去1カ年の経済発展なる短期的動向分析を取りあつかう仕組みになっている。

この長期的分析として、とりあげた特定問題はつぎのようであって、年次分析とあいならんでの、ECAFE地域経済動向の重要な文献である。すなわち、

- 1957: Postwar problems of economic development
- 1958: Review of postwar industrialization
- 1959: Foreign trade of ECAFE primary exporting countries
- 1960: Public finance in the postwar period
- 1961: Economic growth of ECAFE countries
- 1962: Asia's trade with western Europe
- 1963: Import substitution and export diversification
- 1964: Economic development and the role of agricultural sector

本号をとくに紹介したいゆえんは、いうまでもなくこの特集の「経済発展と農業部門の役割」にある。これは、ECAFE地域を対象として、この重要な問題についての、はじめての総合的な分析である。

第1章は、一般的な部門関係である。経済成長過程における部門均衡、ECAFE諸国における農業の相対的地位（雇傭・生産性・所得・輸出の4面において）、最近の経済成長と構造変化（農業部門と非農業部門の相対的成長・農業および製造工業の最近の傾向・1952/54～1961/63間の構造変化）、産業部門間の関係（農業部門の投入産出関係・部門間の需要創出・農業部門の需要創出）を取りあつかう。

第2章は、経済発展の戦略としての農業発展、食糧供給と工業化（食糧の供給と必要・食糧の供給と需要・食糧需給の均衡とそれが工業化のためにもつ重要性・経済発展のための過剰食糧輸入の使用）、農業部門での貯蓄による経済発展への融資、農産物輸出と経済発展の関係、工業化のための農村労働力の供給（農村における失業と不完全雇傭・農業部門から工業部門への労働力の供給・工業部門の農業労働力にたいする需要）、農産工業と農業必需品製造工業（農産工業・農業必需品製造工業とくに肥料工業・両工業の経済発展における役割）および農業発展の問題と政策（土地改

革によるインセンティブ・農産物商品化によるインセンティブ・消費と節約との関係・農業技術の変化）が、とりあげられる。

第3章は個々の国についてのケース・スタディズ。食糧問題にかんしては、インド・インドネシア・パキスタン・韓国、農業と工業との関係を、台湾・オーストラリア・ニュージーランドについて分析する。最後に日本の経済発展における農業の役割がとりあげられている。

この内容から明らかなように、経済発展における農業の役割についての問題点が、十分あますところなく指摘され、しかも、これらの問題点がECAFE地域の諸国の統計でもって現実的に説明されている。まことに、「ECAFEの業績なればこそ」という感じが深い。経済発展における農業を論じたすぐれた文献である。

ただ、全体としての欠点は、ECAFE地域の各国の経済構造や経済成長がひじょうにちがうにもかかわらず、（いいかえると、たんに量的な較差だけでなく、きわめて異質的であるにもかかわらず、）これを主として統計的数値の資料でもって、一貫的に説明しようとしたことにある。しかし、これはなにも、本書や、またその他のECAFEの出版物だけにかぎらず、ECAFEの組織や活動の本質的なものについて批判されるべき点である。（本岡 武）

E. K. Fisk: *Studies in the Rural Economy of South East Asia*. Eastern Universities Press Ltd. for University of London Press Ltd., Singapore, 1964. 108 p.

著者 Fisk 氏は、現在、Australian National University に属する Research School of Pacific Studies の経済学 Senior Fellow である。かれは、1947年から1960年にかけて、最初は Malayan Civil Service、つづいて Colombo Plan Economist として、マラヤに在勤、主に Malayan Rural and Industrial Development Authority に勤務、そこの初代の経済計画部長であった。その間はもちろん、オーストラリアでの研究生活に移ってからも、つぎつぎ論文を発表、マラヤの農業経済研究についての第1人者だ。

その既発表の論文のいくつかをまとめたものが、本書「東南アジアの農村経済研究」である。著者の学識・経験からだけでなく、こうした文献がきわめて少な